

『今月の天候と農作業』

通巻第5542号
4月号
平成24年3月30日発行
宮崎県
宮崎地方气象台



【九州南部1か月予報】

向こう1か月の気温、降水量及び日照時間の各階級の予想される確率は次の通りです。

【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	60	30	10
降水量	九州南部	40	40	20
日照時間	九州南部	20	30	50

【概要】

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べて晴れの日が多い見込みです。

期間の前半は気温が低く、かなり低い時期があるでしょう

向こう1か月の平均気温は、低い確率60%です。降水量は、平年並または少ない確率ともに40%。日照時間は、多い確率50%です。

<1週目の予報> 3月31日(土)～4月6日(金)

天気は、数日の周期で変わり、31日と期間の後半に気圧の谷の影響で曇りや雨の降る日があるでしょう。31日は荒れた天気となるおそれがあります。期間の前半に霜のおりる所があるでしょう。(詳しくは週間天気予報をご利用ください。) 気温は、低い確率80%です。

<2週目の予報> 4月7日(土)～4月13日(金)

天気は、数日の周期で変わりますが、平年に比べて晴れの日が多いでしょう。

気温は、低い確率50%です。

<3週目から4週目の予報> 4月14日(土)～4月27日(金)

天気は、数日の周期で変わるでしょう。

普通作物

◆ 早期水稲

今年の苗は育苗後半が日照不足であったため、全体的に軟弱となりました。田植え後は気象情報に注意し、適切な水管理で初期生育の促進を図りましょう。

1 水管理

田植え後の1ヶ月は、早期に分げつを確保するために丁寧な水管理が必要です。特に活着までの約1週間は、葉面からの水分蒸散量を少なくし、寒風や低温から稲を守るため、葉先が数センチ出る程度の深水とします。活着後は、やや浅水とし、水温と地温を上げて生育と分げつを促します。用水の水温が低く、毎年水口周辺に青立ちが見られる水田は、内畔やポリチューブ設置による回し水で冷水を分散させます。

2 病虫害対策

つけ苗は、葉いもちが発生しやすく発生源となりますので、補植が終了したら早めに処分しましょう。また、ジャンボタニシによる被害が予想される場合は、薬剤による防除を行いましょう。

3 除草剤の使用

除草剤には、ノビエの葉期で処理期限が表記されています。早期水稲でのノビエの葉齢の展開日数の目安は、一葉期が移植後9日目、二葉期が12日目となります。ただし、代かきから移植までの日数や天候によってはノビエの生育が早くなる場合がありますので散布が遅れないように注意しましょう。

軟弱徒長した苗は深水で傷みやすく、田植え直後の苗は、低温に遭うと衰弱してしまい薬害が出やすくなります。苗が弱っている場合は、除草剤の処理期限内の範囲で苗の回復を待って散布しましょう。

近年、投げ込み型のパック剤やフロアブル剤等の手軽な散布が普及していますが、一方で処理時の水深不足による薬害の発生も見られます。速やかな薬剤の拡散のために、処理時は最低5センチは水深を確保しましょう。水管理の良否が除草効果に大きく影響しますので、散布前には畔や水尻から漏水がないか確認し、散布後は掛け流しにせず一週間は水

尻を閉め止水しましょう。除草剤ラベルの記載内容をよく確認して適切に使用しましょう。

◆ 麦類

1 排水対策

降雨が続くと湿害が発生しますので、排水溝を整備しましょう。

2 病虫害防除

赤かび病防除のため、小麦では穂揃期（開花期）に、二条大麦では穂揃期から7～10日後（蒴殻抽出期）に防除します。天候不順の場合はその7日目頃に2回の防除を行います。また、水分が高い状態で長く袋の中におくとカビが蔓延しますので、収穫後は速やかに乾燥させましょう。

3 収穫

収穫までの登熟日数は、出穂後小麦で45日、二条大麦で40日程度です。3月下旬に出穂した場合、収穫は5月上中旬になります。

（ 鎌田 博人）

施設野菜

◆ きゅうり

日中の気温が上昇し、日射しも強くなり、葉からの蒸散量が多くなりますので、かん水量を多くします。また、葉に直射光線が当たると、葉の老化や葉焼け症等の発生につながりますので、日中は内張カーテンを利用し日射量を調節します。ハウス内が乾燥すると、尻細り果等の発生につながりますので、乾燥している場合には、通路散水等による湿度確保に努めます。

◆ ピーマン

夜温も上昇するため、内張カーテンを下ろすと加温機の作動時間が短くなり、ハウス内の湿度が高まり病害が発生しやすい条件が続きます。ハウス外の最低気温が14度以上の場合には、内カーテンを開放し、暖房機が稼働するように管理します。また、日中は内カーテンを利用することで、日射量

を調節するとともに、換気に努め、ハウス内の温度を30度以下に管理しましょう。

茎葉が繁茂し、光線の透過不足等により白果の発生や赤果の発生が多くなるとともに、成り疲れ等によるうどんこ病の発生が懸念されます。適期収穫を心掛けるとともに、着果のない中枝や老化枝、主枝上部の徒長枝など光線を遮っている茎葉の整枝・せん定を行います。また、土壌水分が不足すると草勢が著しく低下するのでこまめなかん水・追肥による草勢維持に努めます。

◆トマト類

ミニトマトは気温上昇にともない裂果が多くなるので、かん水量に注意します。また、湿度を下げるため日中の換気を徹底し、収穫遅れがないよう適期収穫に努めます。大玉トマトは、高温で乾燥すると尻腐果の発生が多くなるのでかん水量を多くします。また、草勢が低下すると小玉果が発生しますので追肥が遅れないように注意しましょう。

◆いちご

次年度の育苗時期となりますが、重要病害である炭疽病の発生による苗不足等は、いちご生産に大きな打撃となります。炭疽病を発生させないためには、感染していない健全な親株を使用するとともに、感染の疑いがある場合は早期に除去処分するなど、万全の対策が必要となります。

(郡司 孝幸)

葉茎根菜類・いも類

栽培ほ場の土壌水分の確保 今月は上旬からマルチ栽培のかんしょ、さといもの植付け及び各種夏野菜のは種適期となります。土壌が乾燥した状態でマルチ被覆を行うと、発芽不良や生育障害、品質低下につながりますので適当な土壌水分（手で握って団子になる程度）の時にマルチ畝立てを行います。

◆スイートコーン

大型・小型トンネル栽培は、4月上・中旬の雄穂抽出期が追肥の時期となります。雄穂が出始めたら窒素成分で5～6^キを追肥しましょう。追肥の時期が遅れると効果がありま

せんので適期に施用することが重要となります。

雄穂抽出の10日から2週間後に雌穂（絹糸）が抽出し、その部分が果実となりますが、ボリュームがあり先端まで充実したスイートコーンを生産するためには、土壌水分が必要となるので、通路へのかん水等を行います。また、トンネル内の高温による葉焼け等を防止するため、ビニルの除去及び開閉管理には細心の注意を払いましょう。

株元からの分けつは、光合成による養分確保を行いますので、除去しないようにしましょう。

◆ さといも

早生種のマルチ栽培は萌芽期となります。芽の日焼けは生育遅延を招きますので、萌芽を始めたらマルチに穴を開けて芽出しをおこないます。中生さといもは植付期となりますが、マルチ内が乾燥していると、芋肥大期の生理障害等を助長しますので、マルチ被覆前の適度な土壌水分が必要となります。

◆ 食用かんしょ

マルチ栽培の植え付け時期となります。苗床を外気に慣らしながら、かん水も徐々に減らし苗の馴化を図ります。上旬は遅霜の影響や平均気温が不足することから挿苗後の活着が悪く、欠株も生じやすくなります。採苗は午後から行い、挿苗予定の3～5日前に苗を取り置きし、暖かい日（できれば曇天）に植え付けします。

◆ ばれいしょ

萌芽～初期生育期となります。定期的にアブラムシ、疫病の予防を行います。

◆ オクラ

中旬以降が播種期になります。上旬は気温が低いいため、立ち枯れ病が多発しやすくなりますので、早播きする場合はトンネル被覆など地温を上げる対策が必要です。

（河野健次郎）

果樹

1 常緑果樹

◆かんきつ全般

過去2年間の結果不良を受け、今年は着花数が多いことが予想されますが、近年は樹による着花のばらつきも多く見られます。着花数の少ない樹では、新芽との養分競合によって花芽の発育不良や生理落果が助長されるので、発芽後に着花の見られない枝は、前年枝の基部から除去しましょう。

また最近では、発芽から開花までの期間が短く、花の充実不足に伴う生理落果が見られます。花の充実のため、開花期までに窒素主体の葉面散布を数回行いましょう。

◆完熟きんかん

剪定の終わっていない園は、急いで実施しましょう。たっぷりのかん水、春肥の施用、土壌改良資材や完熟堆肥等の有機物の投入によって樹勢回復を図りましょう。結果枝の充実を図るために、新梢の発芽期から窒素主体の葉面散布を数回行いましょう。

◆日向夏

日向夏の結果安定には、人工受粉の実施が必須となります。適切な条件で花粉を採取し、精製してから受粉に利用しましょう。精製した花粉は発芽率の調査をした上で、適正な倍率に希釈してから受粉に利用しましょう。

◆マンゴー

収穫が近づくにつれて果皮が弱くなり、結露によって表面の細胞が破裂し、やに果が増加してきます。早朝の換気や敷きわら等による湿度調節によって結露を防止しましょう。

また、新芽の発生の増加にあわせてアザミウマ類の発生が多くなります。発生した新芽をすべて除去し、アザミウマ類の発生を防止しましょう。

2 落葉果樹

◆かき

摘蕾は生理落果後の摘果に比べて、樹体養分の確保や翌年の花芽分化に有効です。開花始め頃から二分咲までの間に実施しましょう。1結果枝当たり1花を原則とし、長い結果

枝には2～3花とします。

◆なし

なしの摘果は初期肥大に大きく影響を与えるので、早期に実施しましょう。開花10日頃から予備摘果として1果そう当たり1果に摘果し、満開1ヶ月までに3～4芽に1果を目安とし仕上げ摘果を実施しましょう。

(山口和典)

花き

◆電照ギク

日中の気温が高くなる時期ですので、ハウスの換気を徹底して茎葉のしまった水揚げの良い切り花にします。天候は比較的良い予報ですが、曇天が続くと白さび病が発生しやすくなりますので定期的な予防が必要です。また、マメハモグリバエ等の害虫の発生も多くなりますので、定期的な防除を心がけてください。

秋ギクの親株育成の時期です。育苗は作型と穂冷蔵の有無等の条件を考慮し、所要日数を計算して計画的に作業を進めてください。電照キクはその作型の出荷期が決定するとその前の作業は自ずと決まります。親株の育成時にその年の年間栽培計画を立て計画的な作業が出来るようにしましょう。

◆夏秋ギク

8月出荷作型の挿し芽を中旬から順次行います。過剰な肥料の投入は柳芽、貫生花等の生理障害の原因となりますので、事前に土壌分析を実施し投入量を決めてください。5、6月出荷作型の「フローラル優香」は、低温により貫生花の発生が増加しますので、4月いっぱいまでは10度、消灯後3週間程度は16度を保ち、その後はハウスの開閉を行い温度を保つようにしてください。ジベレリンの散布は系統により回数、濃度を考慮しましょう。

◆スイートピー

受粉～子実の肥大期になります。ウイルス症状等が発生

している株は事前に抜き取りを行うとともに、必ずつる下げを行ってください。またサヤについている花卉は灰色かび病の発生原因になりますので天気の良い日にネットをゆすり花卉を落とすとともに、防除を徹底してください。また、受粉時期のかん水、施肥管理は、草勢を見て必要に応じて液肥を施用し、莢が大きくなり始めたら徐々に薄い液肥を施用してください。

◆ホオズキ

十分に光が当たるように、間引きを早めに行い株の充実を図りましょう。7月出荷予定の作型では4月中～下旬から確実に着果を行う必要がありますので、中～下旬にはマルハナバチを導入し着果の促進を図りましょう。また、最低温度が10度を下回ると、花粉の発芽が悪く着果不良となりますので、特に夜間から早朝にかけての温度管理には注意しましょう。立ち枯れ性病害は7～8月に多発しますが、生育初期からの防除がポイントですので必ず防除を行いましょう。

◆シキミ

春芽の萌芽時期になります。定期的な防除を実施し、黒シミ斑点病やサビダニ類の発生を抑えましょう。

◆ラナンキュラス

出荷が終了したほ場で球根養成に入る場合は、養成株に感染が広がらないように、ウイルス罹病株を抜き取り、焼却か埋却処分を行います。養成株については、蕾を摘除し、球根の肥大を促します。

◆一般切花

トルコギキョウ・デルフィニウムなどの出荷期が続きます。曇雨天が続くと灰色かび病が発生しやすくなります。防除を徹底するとともに日中の換気を良くして茎葉のしまった品質の高い切花栽培を心がけましょう。

(中村 広)

畜産

◆家畜

今月は、天気と気温の変動が大きいのが特徴です。気温の大きな変化は、特に幼畜にとってストレスになりますので、温湿度に十分気を配り、暖かい日中に換気するように心がけます。また、家畜の体調管理には十分に気を付けましょう。

害虫が活動を始める時期となります。ハエ等の発生を防ぐために、牛舎の清掃や消毒をこまめに行うことが必要です。たい肥の切り返しは、発酵温度を上げることになり、良質なたい肥の製造はもとより殺虫にも効果的です。

◆飼料作物

今月はとうもろこし・ソルガムの播種時期となります。自給飼料の確保のため、計画的な作付けを行いましょ。台風や天候不良などのリスク分散の観点からも、作付時期や収穫時期が重ならないよう品種をばらして作付けするようにしましょ。また、適正施肥、栽培基準を守るとともに、除草剤の使用に当たっては、他の作物へ飛散しないようドリフト対策を徹底してください。

イタリアンライグラスの生育が盛んな時期になります。イタリアンライグラスの1番草は栄養価が高く、子牛用の粗飼料として最適ですので、晴天が続く時期に良質の乾草を確保します。なお、収穫したイタリアンライグラスに、牛が中毒をおこす硝酸態窒素の含有率が高いことがあるので注意します。葉の色が通常より青黒い場合は最寄りの西白杵支庁・各農林振興局（農業改良普及センター）にご相談ください。

◆家畜防疫

近隣諸国において、口蹄疫が続発しています。引き続き家畜防疫の徹底をお願いします。

（須崎 哲也）

特用作物

◆茶

3月中旬以降の気温がやや低めに推移し、早生種の一番茶の萌芽は、平年より2～3日遅いと予想されます。

1 防霜対策

生育に合わせた設定温度の確認とともに、晩霜注意報時にはファンの首振り、回転方向、スプリンクラのヘッドの詰まり、回転等を再確認し、人為的ミスによる被害がないよう注意しましょう。

2 施肥と防除

山間地域の芽出し肥は摘採20～25日前までに硫安等の速効性肥料を芽の動きに遅れないよう実施します。

カンザワハダニは気温の上昇とともに密度の増加が心配されます。発生を確認し、地区の基準に準じ、葉裏にかかるよう防除します。

3 摘採及び製造

燃料価格の上昇、茶価格低迷の中、単価アップのためには、良質茶の生産が重要です。工場の能力、経費（燃料費）と生育状況・雨天を考慮し、摘み遅れにならないよう萌芽～開葉状況を確認し、品質向上のため摘採前5～7日間被覆を行うなど、的確な摘採計画と実施により良質な生葉生産を徹底しましょう。

また、事前に摘採機の刃研ぎ、すり合わせや製茶機の点検、調整、清掃、試運転等によりトラブル回避に努めましょう。

摘採時は無理な詰め込みは避け、摘採後は速やかに持ち込みます。製茶時の茶温管理を守り、欠陥のない荒茶製造に努めるとともに、異物混入防止対策にも万全を期してください。

(岩切健二)

◆しいたけ

1 選別

乾しいたけは、用途に応じて取引されるので、商品価値を高めて販売するためにも、規格表を参考に必ず選別を行い

ます。特に、次の点に注意しましょう。

- ①異物（虫、金属類等）は絶対入れない。
- ②乾燥不良、虫害、カビ、黒子など規格外品は絶対に混ぜない。
- ③3 cm以下は他のサイズに混ぜない。
- ④バレと縁に巻きがあるものを混ぜない。
- ⑤できるだけ種菌、採取時期、日和子、雨子別に行う。
- ⑥丸形と変形とは区別する。
- ⑦雨の日など湿度の高い時には行わない。

2 箱詰め

箱詰めは、最初からたくさん入れずに、まず二分入れて揺すり込み、さらに四分、六分、八分と入れ、最後に十一分ほど入れて丹念に揺すり込みます。箱詰めがゆるいと、輸送途中で欠け葉を生じ、商品価値の低下をまねく恐れがありますので注意が必要です。

3 採取

気象情報に注意しながら適期採取に努めましょう。

（田中 貴司）

◆葉たばこ

今月は、土寄や収穫・乾燥に向けた準備が主な作業となります。

1 土寄は、植付け1ヶ月後程度（最大葉が触れ合う状態）に実施しましょう。時期が早すぎると幹が傷つき、病害発生の原因となります。また、遅すぎると肥料吸収が鈍化し、成熟が遅れます。

不定根の発達促進のため、株元までしっかり土を寄せましょう。特にローラー土寄を行なった際には、土が寄せられているか確認しましょう。土寄に併せて植付け穴のちぎれそうなマルチ、ほ地内に飛散しているマルチ片を回収しましょう。

2 たばこ黄斑えそ病発生防止に向けて、防虫ネットの設置や共同防除に向けた話し合いを行いましょう。

3 収穫・乾燥へ向けて作業場・貯蔵庫の清掃、使用物品の点検更新、及び乾燥機の点検・空焚きを実施しましょう。

4 農薬を使用する際には「たばこ用農薬の使用基準」を遵守し、使用後は「農薬使用実績票」等に必ず記帳しましょう。

（中矢 恭輔）

内容の詳細について

4月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県営農支援課及び森林経営課、日本たばこ産業南九州原料本部が担当しています。各作物の病虫害の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

なになに農業アラカルト

農業改良普及センターにおける家畜防疫対策の実施について

平成24年3月から県内8カ所にある農業改良普及センターに車輛消毒装置を設置し、関係車輛への車輛消毒を実施しています。

農業改良普及センターにお立ち寄りの際は、車輛消毒への御理解と御協力をお願いします。

1 目的

口蹄疫などの影響を受けた本県畜産の再生・復興のためには、二度と口蹄疫等を発生させないことが重要であり、さらなる家畜防疫体制の強化が必要です。

そこで、畜舎を含む現地巡回を行う機会が多い農業改良センターに車輛消毒装置を設置し、普及センターの車輛はもとより、農業者や農業関係機関・団体など、普及センターに出入りする車輛への消毒を実施し、防疫体制の強化を図っています。

2 消毒の実施

車輛消毒は、「口蹄疫」及び「高病原性鳥インフルエンザ」の家畜伝染病を防疫対象として、国内外での発生フェーズ（段階）に応じて、表1のとおり実施します。

現在は海外で口蹄疫等が発生しており、「海外発生」フェーズとなりますので、県公用車や農業者・関係機関の畜産関係車輛を対象に車輛消毒を実施しています。

3 最後に

口蹄疫は依然としてアジアを中心に発生が続いています。一昨年 of 悲劇を二度と繰り返さないためにも、農業改良普及センターでの車輛消毒に御理解と御協力をいただくとともに、各農場におかれましても、畜舎内外の消毒はもとより、畜舎へ入る場合の衣類や長靴の交換・消毒など、さらなる防疫の徹底をお願いします。

(営農支援課)

表1 各フェーズにおける消毒の実施について（農業改良普及センター）

区 分		フェーズ		通 常 時	海外発生	国内発生	九州発生	県内発生
施設全体	①玄関に靴底消毒マット設置			(○)※2	○	○	○	○
	②施設出入口での石灰散布又は消毒マット等の設置			—	—	—	○	○
車輛消毒装置	①農業改良普及センター	公用車(普及センター以外の県公用車を含む)		○	○	○	○	○
		職員私用車		—	—	—	○※3	○※3
	②農業者	畜産関係車輛 ※1		○	○	○	○	○
		〃 以外		—	—	—	○※3	○※3
	③関係機関(市町村・JA企業等)	畜産関係車輛 ※1		○	○	○	○	○
		〃 以外		—	—	—	○※3	○※3
	④運送・郵便等車輛(畜産関係車輛を除く)			—	—	—	○※3	○※3

注) 各フェーズの○印部を消毒対象とする。なお、

※1 畜産関係車輛とは、畜産農場に出入りする車両とする。

※2 宮崎県口蹄疫防疫マニュアルに基づく「消毒の日」にのみ設置する。

※3 普及センターや市町村・JA等の職員で家畜を飼養している場合又は、対象車輛で畜産農場に出入りする時には実施する。なお、発生場所や状況に応じて普及センターごとに対象車輛を決定する。

向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
早期水稲	いもち病	—	置き苗は、いもち病の発生源や伝染源となるので早めに処分します。箱施薬をしていないほ場で、イネミズゾウムシの発生が目立ち始めたら粒剤の水面施用を行います。 スクミリンゴガイの生息数が多い場合は、捕殺あるいは粒剤を水面施用します。また、用排水路からの侵入を防ぐため、水の出入口にネットを設置します。
	イネミズゾウムシ スクミリンゴガイ	— —	
野菜・工芸作物	アブラムシ類	並	各種のウイルス病を媒介するので、早期発見・防除に努めます。
冬春きゅうり	べと病 うどんこ病 褐斑病 黄化えそ病	並 やや少 並 —	いずれの病害も罹病葉は伝染源となるので、適宜摘葉し、ほ場外に持ち出します。 キュウリ黄化えそ病の感染株を確認した場合は、速やかに罹病株を抜き取り、ビニル袋等に入れて完全に枯れるまで密封処理します。また、本病を媒介するミナミキイロアザミウマの発生がやや多くなっていますので防除情報を発表しています。
	ミナミキイロアザミウマ タバココナジラミ類	やや多 並	
冬春ピーマン	うどんこ病 斑点病 黒枯病	やや少 やや多 前年と同程度	いずれの病害も発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、予防・初期防除に重点をおきます。また、罹病した茎葉は重要な伝染源となるので速やかに除去します。 アザミウマ類は、気温の上昇とともに増殖しやすくなるので、発生初期に防除を行い、中～多発生のほ場では短い間隔で定期的に薬剤散布を行います。
	アザミウマ類 タバココナジラミ類	並 前年、前々 年より多い	
冬春トマト	灰色かび病 葉かび病 トマト黄化葉巻病 (TYLCV)	やや多 並 前年、前々 年より多い	灰色かび病の発生がやや多い状況です。加温機の稼働時間が短くなり、果実等が結露しやすくなるので、循環扇を作動させる等施設内環境の改善に努めます。 タバココナジラミ類は、気温の上昇に伴い活動・増殖が活発になります。近年、トマト黄化葉巻病など本種によって媒介されるウイルス病が問題となっていますので、各人が防除を徹底し、地域全体の密度低下に努めます。
	タバココナジラミ類	やや多	
冬春いちご	うどんこ病 灰色かび病	やや少 並	株整理後の葉数が少なくなった時に、薬剤散布を行うと効果が高まります。いずれも薬剤抵抗性が発達しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用します。 特にオンシツコナジラミについては、地域により薬剤感受性の低下が確認されているので、地区の普及指導員や技術員の情報を参考にして防除する必要があります。
	ハダニ類 オンシツコナジラミ	やや多 前年より多い	
カンキツ	そうか病 かいよう病	— —	いずれの病害も、罹病した枝葉は重要な伝染源となるので徹底的に除去します。 ミカンハダニの要防除水準は、寄生葉率30%あるいは葉当たり寄生虫数0.5～1頭です。
	ミカンハダニ	やや少	
茶	カンザワハダニ	並	一番茶萌芽期以降発生が多い場合には、農薬使用基準の摘採前日数等に注意して防除します。

1) 「発生量」は、過去 10 年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。
2) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、<http://www.jpnpn.ne.jp/miyazaki>です。